

住吉派興隆と天台宗との関係について

下原美保

(二〇〇七年一月三日 受理)

The Relationship between the Prosperity of the Sumiyoshi School and the Tendai Sect

SHIMOHARA Miho

要約

住吉派は江戸時代初期に創設された新興の流派であるが、二代目具慶の代には將軍家の御用絵師に抜擢される。

本論は、同派興隆の理由を、天台宗との関係に焦点をあてて考察を加えたものである。同派は天台宗門徒であるが、初代如慶や二代目具慶は、堯然法親王や堯恕法親王より得度されている。かれらは天台座主であるとともに皇族の一員であり王朝文化の担い手でもあった。また、如慶が年少の頃、天海と知遇を得ていた可能性が高いこと、その後、同派の興隆を促す画事（「東照宮縁起絵巻」諸本・「元三大師縁起絵巻」）、「慈眼大師縁起絵巻」に天海が深く関与していたことを指摘した。

また、これまで紹介される機会の少なかった住吉派による天台宗関連作品を例に挙げ、同派の信仰や、当時の朝幕関係がその制作背景にあることを確認した。

はじめに

住吉派は、初代如慶によつて寛文三年（一六六三）に創設された新興の流派である。しかし、その息子具慶の代には徳川將軍家の御用絵師に抜擢されるなど、画壇の中でも異例の躍進をとげている。江戸時代初期の王朝文化復興の気運に、同派がうまく乗じたことがその理由の一つであろう¹。

本論では、同派興隆のもう一つの要因と考えられる天台宗との関係に焦点をあてたい。特に、同派が天台宗との人脈を介して、皇族や將軍家とも関わりをもつたことは、これまで十分に検討されてこなかった。よつて、本論ではこの点に注目し、天台宗関連の画事とともに考察を加えていきたい。

1 堯然法親王法と堯恕法親王法

(1) 天台門徒としての住吉如慶・具慶

同派と天台宗との関係で、最初に注目すべきは、如慶、具慶父子が、当時の天台座主である堯然法親王法（一六〇二〜六一）及び堯恕法親王（一六四〇〜九五）に剃髪されて得度し、それぞれ法名を拝受している点である。如慶の場合は、寛文元年（一六六一）に得度し、同年二月九日に法橋に叙任されたこと、その際、剃髪したのが堯然法親王であったことが『住吉家旧記』²の記事

寛文元年剃髪號如慶、同年二月九日叙法橋

（中略）

廣通剃髪者、妙法院宮堯然法親王剃刀、如慶號蒙

より確認できる。

具慶の場合も延宝二年（一六七四）に剃髪され、同年六月四日に法橋に叙任されたこと、剃髪したのが堯恕法親王であったことが『住吉家日記』の記事、

延宝二年剃髪號具慶同年六月四日叙法橋

（中略）

廣澄剃髪、妙法院宮堯恕法親王剃刀

や、『堯恕法親王日記』延宝二年（一六七四）五月一七日の條の

十七日、住吉絵所廣純土佐内記得度、此者父如慶ヨリ以来経歴之間、予加剃刀早、法名眞慶

より確認できる。ここでは、（具慶が）父如慶の代より関わりがあるため、予（堯恕法親王）が剃髪したとある。つまり、前代の妙法院門室である堯然法親王が父如慶を剃髪した経緯で、自らは息子具慶を剃髪したというのである。

如慶、具慶父子がどのような経緯で天台宗に帰依するようになったのかは定かでないが、同日記寛文五年（一六六五）二月二六日の條には、具慶が僧侶や檢校などと親王を訪れたという記事を見出すことができる。また、寛文九年（一六六九）一〇月一六日の條には、具慶が比叡山に登っていたことが記され、剃髪の時だけでなく、常より堯恕法親王や天台宗関係者たちと交流があったと推測される。

さらに、同年二月二七日の條に注目すると、堯恕法親王が画工山本正満なる人物の得度にも関わっていたことがわかる。以下がその記事である。

廿七日、画工源兵衛

山本正満得度、予戒師たり、教授房恕僧都、唱置堯憲僧正也、

正満、法名元久、

元久とは『古画備考』に掲載されている法橋元休のことであろうか。

禱として不動法修法を堯恕法親王が禁中より命ぜられるが、その修法次第の中に具慶筆不動明王像が掲げられたとの記事も見出せる。周知の通り、宮中で行われる修法の仏画制作は土佐派の画事であった。それを具慶が手掛けたということは、同派が宮廷においても大きな信用を得ていた証左となるだろう。重要な画事を新興の流派に任せたと背景には、同派が天台宗の門徒であったことも深く関わっていると考えられよう。

さらに、同日記には、堯恕法親王が生前に行った形見分けの中に、如慶の百人一首手鑑が含まれていたとある。このような作品は、上記のような公の画事とは異なり、プライベートで享受されたと推測される。

2 天海との出会い

住吉派興隆と天台宗との関係を考える上で、天海（？～一六四三）の存在は無視できない。天海とは徳川家康・秀忠・家光の三代に任せ、幕府の宗教政策に多大な影響を与えた人物である。元和二年（一六一六）四月一七日に家康が駿府で死去した際、神号を巡って金地院崇伝と争い、最終的には天海の意見が聞き入れられ「東照大権現」となったエピソードは有名である。特に、家康の天海に対する信頼は厚く、慶長一六年（一六一一）には天台宗に帰し、同一九年（一六一四）には天海より天台宗の血脈を授けられている。また、前年の慶長一八年（一六一三）には関東天台宗の全件が天海の住する川越喜多院に定められ、さらに寛永二年（一六二五）には、延暦寺に対する東の大寺として天海が寛永寺を開くこととなる。周知の通り、以後、同寺は徳川家の廟所となるのである。天海は皇室との関係を保ってきた比叡山に対抗しようとする意識から寛永寺に宮門跡をたてることを強く望んでいたが、生前にその願いは叶わず寛永二〇年（一六四三）に死去する。しかしながら、その後も同

もしそうであれば、同書法橋元休の條には、

○絹本六々歌仙、書近衛家熙公、鷹司兼熙公之輩也、毛利家下屋

敷内寺ニアリ、文政己卯三月觀、画法如慶、具慶を学ブカ

とあり、これも住吉派周辺で学んだ絵師と推測される。この事例も同派と天台宗との関わりを示す興味深い記事といえよう。

(2) 堯然法親王・堯恕法親王の文化事業

住吉如慶、具慶父子を剃髪し法橋の位を授けた堯然法親王と堯恕法親王であるが、かれらは後陽成院の第六皇子（後水尾院の弟）と後水尾院の第十皇子にあたる。つまり、皇室出身の天台座主であった。よって、宮中における文化サロンの一員でもあり、自らも高い文化的素養を有していた。

堯然法親王は能書家で知られており、絵画、立花、香道、茶道にも秀でていたという。

また、堯恕法親王は、天台教義の研究を重ねる傍ら、書や絵画にも深い関心を抱き、自ら制作にあたることもあった。親王の画事における有名なエピソードとしては、後水尾天皇の寿影を制作したこと（衣装の文様は狩野探幽に描かせている）が挙げられ、妙法院には、この時の画稿が現在でも遺されている。

この他に親王は、横川華藏院寂場堂の本尊、俊成像・雪梅図・梅鶯図、大聖寺殿新造座敷の襖障子押絵なども手掛けており、場合によつては絵師をして、古画を模写させることもあった。

このように、皇室の重要なメンバーであり、文芸にも造詣の深い両親王から戒を授けられたことは、新興の流派である住吉如慶、具慶父子にとって重要な意味をもっていたであろう。現在、妙法院には伝如慶筆「堯然法親王像」と伝具慶筆「堯恕法親王像」が遺されている。

また、同日記天和元年（一六八一）二月一日の條には、改元の御祈

寺の発展は続き、正保四年（一六四七）には天海の宿願であった守澄法親王（後水尾院第三皇子）が入山する。以後同寺は、日光山、東叡山、比叡山の三山を兼ねて天台宗を掌握する寺となり、益々栄えていった。

ところで、同派が天海とどのような経緯で知遇を得ることができたのかについては、「東照宮縁起下絵」の奥書に詳しい。そこには、

如慶廣通、始土佐内記、幼少之時至廬山寺、学問修業のため、

天海僧正の御弟子、児名千代刃丸といへり。及成人、天海師の

御教諭厚く、剃御患深く、家の業までも被掛御思慮、難及於官

庫所納古畫類、寫得而為畫本、偏天海師の恩恵也。

とあり、如慶が幼少期に学問修業のため廬山寺にいたこと、天海の弟子で児名を千代刃丸と称したこと、成人してからも天海の教諭厚く、家業のことまで配慮され、天海の恩恵によつて官庫の古畫類を写して畫本を作成することができたこと等が記されている。また、如慶は天海の取り持ちで徳川家康に拝謁し、「東照宮縁起絵巻」もその口添えで制作に携わったとの記録が残る。後者は年代的に齟齬があるため一考を要するが、これらの記事からは、天海が同派のために少なからず助力していたことが推測できる。

残念ながら、これ以上天海と同派との関係を示す史料は、管見の限りにおいて見出すことはできない。しかし、天海と同派、特に如慶が接触した可能性は皆無とはいえない。

天海の活動は、主に関東周辺の天台寺院であった。しかしながら、比叡山で争乱が起きた際、家康が施薬院宗伯に、争議を治め寺務の司となるのは誰かと問うたところ天海の名前が挙げられ、慶長一二年（一六〇七）に比叡山東塔南光坊への在任を命じられたという。翌々年には家康の命によつて、天海は叡山の学道勧誘のため上洛している。

また、ちょうど同じ時期に、後水尾院の父後陽成院（一五七一～一六

一七)とも盛んに接触していた。慶長一四年(一六〇九)には院に天台宗の法要を説き、また、同一六年(一六一一)三月には僧正となつて院より毘沙門門室の号を賜っている。詳しくは後述するが、慶長一九年(一六一四)には、官庫の書籍を借用するため、天海は院御所に訪れてゐる。

この時期(慶長一二年から一九年まで)、如慶は幼少年期一九歳から一六歳にあたる。「東照宮縁起下絵」の奥書に従えば、廬山寺に於いて修行していた時期となる。廬山寺と如慶、具慶は縁が深く、同寺に父子の墓も残っている。廬山寺は、天慶年間(九三八〜四七)に天台第一八座主慈恵大師(元三大師)良源が天台の学問寺として建立した寺である。後述するように、具慶は東叡山當住龍泉院逗留中に、天海の縁起絵巻(「慈眼大師縁起絵巻」とともに、廬山寺の開山である慈恵大師(元三大師)の縁起絵巻(「元三大師縁起絵巻」)を手掛けてゐる。これらは御用絵師就任以前の重要な画事の一つであり、このことによつて御用絵師に推挙されたと考えられる^{註20}。廬山寺は天正元年(一五七三)頃、現在地すなわち御所の東南地に移転している。如慶が同寺にいたと推測される時期はすでにこの地にあつたことになる。廬山寺が天台宗の学問寺であつたという性格やその立地から考えて、天海が上京し、御所に向向いた際、廬山寺に立ち寄つた可能性は高い。廬山寺と天海、住吉派との関係を示す上記以外の史料を筆者は未だ把握していないが、天海は寛永寺を開山した翌年に、「山門執行探題」として廬山寺法度を発布している^{註20}。このことから、同寺が天海の管轄下に置かれていたことは確かである。

「東照宮縁起下絵」の奥書で、もう一点注目したいのは天海の恩恵により、如慶が官庫の古書類を写して畫本を作成したという記事である。これを裏付ける史料も現在のところ確認していないが、別件において天

海が官庫から書物を借用した記録が残っている。それは、慶長一十九年(一六一四)一月九日のことである^{註21}。徳川家康が官庫における書籍の借用を天海に命じたもので、天海はその仲介役として仙洞院に赴いてゐるのである。その際、後陽成院より家康への土産ものとして薰物一包を与えているが、これも天海が預かつてゐる。先述のように、家康同様、天海は後陽成院からも絶大な信頼を得ていた。また、天海は公儀の場だけでなく、仙洞院における後陽成院の『源氏物語』御講義を聴聞したり、仙洞院での御前暮を所望されるなど、プライベートでも交流があつた^{註22}。これらのことを考慮すると、天海の口利きで如慶が官庫の書物を見学した可能性も決して低くはないであろう。

3 天台宗関連作品

(1) 住吉具慶筆「元三大師縁起絵巻」・「慈眼大師縁起絵巻」

次に、住吉派が手掛けた天台宗関連作品をいくつか紹介したい。

まず、最初に注目するのが、住吉具慶筆「元三大師縁起絵巻」(寛永寺蔵)と「慈眼大師縁起絵巻」(同)である^{註23}。

「元三大師縁起絵巻」は、第一八代天台座主で「叡山中興の祖」といわれた元三大師良源(九一二〜九八五)の、「慈眼大師縁起絵巻」は天海の生涯と事績を題材とした絵巻である。時代は異なるものの、両大師ともに天台宗の高僧として広く知られた人物である。

これらが制作された年代は、東京国立博物館が所蔵する具慶の自筆稿本「元三大師縁起絵巻」(全七巻)六巻巻末及び「慈眼大師縁起絵巻」下巻巻末の奥書より明らかになる。まずは、「元三大師縁起絵巻」奥書に注目したい。ここには、

(款印)

絵段尾二名印和画士住吉印

「法橋具慶図之印」

(奥書)

古来嘗有慈恵大師伝両巻高議
玄論不便愚蒙之所覽於茲捨事
於旧記移漢字于倭語且命画工
住吉具慶每事分條而図其景象
蓋欲使白俗之徒仰權化無窮之
妙用得現當不蓋之利益也只患
予素不文半豹尺鷁之学賤言陋
語不足蓋奇行偉德矣有博識之
士繼格之者幸甚

于時延宝七歳屠維協洽六呂下旬

僧正胤海誌之

とあり、本縁起が旧記より(慈恵大師の)事跡を拾い、漢字から倭語になおした上で、画工住吉具慶に命じて事跡ごとに分けて描かせた、との旨が記されている。また、奥書自体は延宝七年六月に、天海の高弟実成胤胤海(一六一三〜八九)によることがわかる。

後者の「慈眼大師縁起絵巻」奥書には、

余嘗自幼侍師之座下而無日不相追
随恰如形影之相從然故其旧勲積
徳取親所識之者而作其伝癸亥

已然之事跡者亡父宗伯所悉職之
異行者往々有異干與実者只以此記

可為証而已

延宝七年己未季冬中旬

慈眼末弟子僧正胤海記之

とある。この内容を概略すると、私は幼い頃より師(天海)の座下に追隨しており、(師のことを)親しく知っている、また、癸亥(元和九年・一六二三のことか)以前の事跡については亡父宗伯が詳しく記している。世人で天海の異行を口にするものもいるが、実際とは異なることが往々にしてあるため、(私が師天海のことを)ここに記した、という内容である。年記は先の「元三大師縁起絵巻」と同年(延宝七年)であるが、半年遅れた一二月に、同じく胤海によつて記されていることがわかる。詞書編纂者の明記はないが、奥書の内容より、両縁起とも胤海が中心となつて編まれたものと推測されよう。

ところで、「慈眼大師縁起絵巻」には、具慶による興味深い款記を下巻末第五段の図中に見出すことができる。それは、

右両大師之縁起者延宝巳未之

歳余隅在武江之日応東叡山衆

侶求而謹新図焉

庚申春三月日 住吉具慶

印

というものである。すなわち、この両大師縁起絵巻は具慶が江戸にいた延宝七年に東叡山の衆侶の求めに応じて新しく描いたものである、という内容である。

この年、延宝七年は、如慶が手掛けた「東照宮縁起絵巻」を具慶が江戸へ持参した年である。

(2) 住吉加慶筆「東照宮縁起絵巻」(日光山本ほか)

「東照宮縁起絵巻」とは、徳川家康(一五四二〜一六一六)の生誕から天下統一、日光へ埋葬されるまでの一生を描いたもので、狩野探幽の手掛けた縁起絵(以下、探幽本とする)が殊に有名である。その祖本となつたのは、寛永一三年(一六三六)に天海が起草した「東照社縁起」

(真名本 一卷)で、後水尾院によって染筆された後、三代將軍徳川家光(一六〇四〜五一)より東照宮に奉納されている。その後、天海と尊純法親王が仮名本の縁起を作成し、これに探幽が絵画を加えた。これが、探幽本である。探幽本は、後水尾院をはじめ、近衛信尋、二条康道ら堂上・門跡など二十四人によって詞書が書き加えられ、寛永一七年(一六四〇)四月一七日の家康二十五回忌に、家光の手により日光東照宮へ納められている。

如慶の「東照宮縁起絵巻」(日光山本ほか)は、探幽本が制作された後に着手されたものである。その経緯については、同時代に記された『堯恕法親王日記』に詳しい。記述内容は以下の通りである。

寛文五年二月二十七日

一、日光山東照宮縁起双紙事、先年従大樹披申諸家ノ御筆ニテ被納宝蔵早、然二諸国武家等参詣之時、件ノ縁起毎度披見度由雖別当申、聊尔二令披見事難成也、仍テ私ニ一通調之、住吉法眼如慶画図之調早又レトモ、詞書之事難調ニ依テ諸家へ申たのむへきよし従去マ年予ニたのむといへとも、予又兎角打過キ早、されとも今年五十年忌以前二首尾有之度由、達而たのよし節々申之間、諸家へ申合漸出来早、然者今度富小路兵部少輔日光下向ニテ、以此便伝別当大業院者也、富小路来ル廿九日発足間、今日富へ遣之、(以下、筆者目録)

この記事によれば、先年、將軍(家光)によって日光東照宮に奉納された探幽本は、諸国の武家が参詣の度に披見の申し出があり、対応することが困難になった。そこで、絵在住吉如慶に、詞書を諸家へ依頼するよう、私(堯恕法親王法)に申し入れがあったものの、そのまま時間が経ってしまった。しかし、今年(家康五十年忌にあたるため)、諸家へ申し合わせて詞書に筆を寄せてもらい、完成した後は、富小路兵部少輔

墨書 法眼具慶筆
住吉法橋門弟ノ千時貞享四襖広芬広重宗広ノ安光定範之五子為菩薩以丹ノ晝画写此像而寄付之
の識語が残る。ここでは、具慶自身が制作者の一人であるため、「住吉法橋」とは如慶のことを指していると考えられる。そうであれば、この図は如慶の菩提を弔うため、具慶とその門下である広芬、広重、宗広、安光、定範が手掛けたことになる。識語には、具慶と共に制作に携わった門下の絵師として五人の名が挙げられているが、最初に記された広芬とは、具慶の跡を継いだ広保(一六六六〜一七五〇)の初名である。また、広重は『古画備考』より源兵衛と称した具慶の門弟であることが、注29、広宗は『東洋美術大観 五』により住吉廣守の門人遠藤廣実の子であることが註明する。安光、定範については不明である。

ここでは、貞享四年の年記があるものの、具慶が法眼に叙任されたのは元禄四年(一六九一)であるため一考を要する。また、同図には住吉派七代弘定(一七九三〜一八六三)が補修したという「嘉永二己酉季十月 住吉弘定再修補」の修理銘が遺っている。よって、識語もこの時に記されたものと考えられよう。

像主である元三大師は、慈恵大師良源を指す。元三大師は、第一八代天台座主で、叡山山上の諸堂の復興につとめ、天元三年(九八〇)には興福寺定昭らを招いて根本中堂の供養を盛大に行うなど、「叡山中興の祖」と仰がれていた。また、住吉派と縁の深い廬山寺の開山でもある。本図が如慶を追善するために描いたという識語通り、同派と天台宗との個人的な関わりを示す作品例といえよう。

住吉具慶筆「慈覚大師帰朝図」(真正極楽寺)

次に「慈覚大師帰朝図」(真正極楽寺)に注目したい^{註30}。本図は、天

に依頼して日光東照宮の大業院へ渡してもらう算段であるという内容である。つまり、如慶が手掛けた「東照宮縁起絵巻」は探幽本の披見があまりにも多いため、副本として制作されたものである。この縁起絵を具慶が江戸へ持参したのが延宝七年であり、寛永寺の子院に滞在した折り、胤海の依頼を受けて制作したのが「元三大師縁起絵巻」と「慈恵大師縁起絵巻」ということとなる。

両縁起絵巻や「東照宮縁起絵巻」は、住吉派と天台宗との深い関係を象徴するだけでなく、寛永寺を舞台にしながら幕府ともすでに繋がりをもっていたことをあらわしている。

(3) その他の天台宗関連作品

住吉具慶筆「守澄法親王像」(輪王寺蔵)

次に、上記以外の住吉派における天台宗関連作品を紹介しておきたいが、如慶の場合、「東照宮縁起絵巻」諸本以外には、先の「堯恕法親王像」(妙法院)などが挙げられるに過ぎない^{註31}。よって、具慶の作品が中心となる。本論では「守澄法親王像」(輪王寺)、「元三大師画像」(護国院)、「慈覚大師帰朝図」(真正極楽寺)を紹介したい^{註32}。

先述の通り、守澄法親王は、東叡山が初めて皇室から宮門跡をたてた人物(輪王寺門跡第一代)である。明暦四年(一六五八)には天台座主にも就任しており、寛永寺にとつては特に重要な人物である。また、同寺が徳川家の菩提寺であることより將軍家とも、さらには親王が後水尾院の第三皇子であることから皇室とも深い関わりをもっている。具慶が本像を描いた経緯は不明であるが、これまでにも父如慶が堯恕法親王の肖像を、自身も堯恕法親王の肖像を描いていたため、引き続き制作の依頼があったと推測される^{註33}。

住吉具慶及び門下筆「元三大師画像」(護国院蔵)

「元三大師画像」は、住吉具慶以下一門(広芬・広重・宗広・安光・

台僧慈覚大師・円仁(七九四〜八六四)が、唐から帰朝する途上にあつて阿弥陀仏の奇瑞に遭遇する場面が描かれている。この時、慈覚大師は經典五五九巻、図像、法具類を携えて帰朝しており、斉衡元年(八五四)には天台座主に就任している。慈覚大師の名は天台宗発展の基礎を固めた人物として広く知られている。帰朝の途の奇瑞については、本図同様、真正極楽寺が所蔵する「真如堂縁起絵巻」上巻第六段に語られており、本図制作も同絵巻を参考にしたと考えられる。縁起の詞書には

(前略)

虚空より船舖の上に小身の阿弥陀仏香煙に住立し成就如是や功徳莊嚴と唱へ給時大師随喜肝胆し至心信樂し給ひて吾朝に来る

至ありて一切衆生を済度し給へき本願いつはりましますは我法衣へ移り給へと祈念し給ひければまのあたり影向し給を即裝

裳に裏とり給と

(後略)

とあり、その様子が絵画化されている。すなわち、大師が船上に立つて香煙立ち上る船帆を見上げる。そこには、黄金の阿弥陀仏が立ち現れているというものである。本図には「法眼具慶筆」の落款と「松嵐」の朱文方印が捺されている。すでに榊原悟氏によって指摘されているが、この印は具慶が手掛けた仏画に多く見出される印である^{註34}。また、画面上部には

成就如是 功徳莊嚴

天台座主三品(花押) 親王書之

の賛がある。二品親王とは堯恕法親王(一六七六〜一七一八)のことである。堯恕法親王は具慶を得度した堯恕法親王の後を受けて妙法院門跡に入った人物で、霊元院の皇子にあたる。ここにも同派と天台宗、特に妙法院門跡との深い関わりを見出すことができる。制作年については年

記はないが、堯延法親王が二品であった年代が元禄十一年(一六九八)から享保三年(一七一八)の間であり、具慶が没したのが寶永二年(一七〇五)のことであるから、制作年代は元禄十一年から寶永二年(一七〇五)であったと推測される。

総括

以上、住吉如慶・具慶父子と天台宗、さらには皇族や将軍家との関わりについて概観してきた。

如慶、具慶父子は天台座主である堯然法親王と堯恕法親王から得度を受けたが、かれらは皇室出身であり、後水尾院を中心とした宮中文化の担い手でもあった。住吉派は天台宗を通じて宮中にも人脈をもつことにより、江戸時代初期の王朝文化復興の時流にうまく乗じることができたといえよう。如慶、具慶父子が手掛けたやまと絵関連作品には、当時の皇族や公家の名前が、詞書執筆者あるいは作品制作のコーディネーターとして名を連ねているが、これはその証左といえる。

また、天海の助力が同派興隆の一躍を担ってきたことについては、これまでにも先学より指摘されてきたが、本論ではさらに、如慶と天海との出会いが如慶の廬山寺時代である可能性が高いことを確認した。もし、そうであれば、天海は絵師として如慶を見出したというより、天台門徒の一人として如慶を知ったことになる。如慶・具慶父子が宮中や幕府の御用をこなしながらも天台宗関係の画事が多いことは、自らが天台門徒であったことが大きな理由であろう。

さらに、天海は将軍家からも厚い信任を得ていた。「東照宮縁起絵巻」制作に象徴されるように、住吉派が幕府の御用絵師に就任する道筋を作るのに、天海は大きな役割を果たしていたといえよう。

四日、法皇御寿影令清書之間、則持參早、御衣紋等ハ可令狩野法印探幽書之旨仰也、仍テ書御面像而献之早、万歳万歳万々歳、
同年六月二日の條

二日、内々御寿像影書改可令進上之旨法皇仰被出、此比書改令献上早、今日狩野法印探幽書御衣紋早、
寛文七年(一六六七)二月一三日の條

同日、従法皇為仰從芝山前中納言書状到来、法皇御寿影去年々予令画図之処ニ、般舟三昧院へ被遣早、其後泉涌寺ノ從一幅可許賜由類ニ望申故、今一幅可令画図由内々仰也、則今日絵續等從宣豊脚来、近日可令画図、可献旨御請申入早、
同年二月二〇日の條

二十日、參院、御寿影清書進献
延宝八年(一六八〇)閏八月十九日 の條
十九日(中略)

於般舟院者各拜御影早、此御影ハ先年予図之、則於御前図御面躰、其後御衣紋ハ狩野法印探幽図之也、有御製贊、其後泉湧寺亦望之申之間、又一幅可令図旨仰也、仍テ御衣紋とも二写之、今在泉湧寺、
注8 『堯恕法親王日記』寛文八年(一六六八)二月十九日の條
十九日(中略)
横川華藏院寂場堂之本尊事、内々予可令画図之由空心僧都ニ申合之間、此比類筆候、
今日成就

注9 『堯恕法親王日記』延宝二年(一六七四)六月十六日の條
十六日、參内、參院、又從女院御絵可圖之旨仰之間、今日進上、俊成像・雪梅・梅鶯
『堯恕法親王日記』延宝三年(一六七五)九月二日の條
二日、大聖寺殿行、行幸・予一乘院宮・青蓮院宮・右大臣殿・日嚴院僧正・祖岸禪師同公、今日彼宮座敷新造処、棚ノフスマ障子押絵等書之

注10

住吉派興隆の大きな要因は、同派と天台宗との関わりの深さにあることを本論では再確認したが、当時の朝幕関係、両者を往来する天海の思惑が、「東照宮縁起絵巻」や「元三大師縁起絵巻」、「慈恵大師縁起絵巻」、あるいは「守澄法親王像」など、同派の絵画制作にも反映されていた。今後は、これらの作品一点ずつに注目し、同派興隆の要因について具体的に検討していきたい。

注

注1 拙稿「江戸時代初期における王朝文化復興と住吉派興隆について―後水尾院と住吉如慶・具慶との関係を中心に―」(鹿児島大学教育学部研究紀要「人文・社会科学編」第五八巻、平成一九年三月)

注2 住吉派と天台宗との関連については、「江戸のやまと絵―住吉如慶・具慶―」展図録(サントリ―美術館 昭和六〇年二月)等でも指摘されている。

注3 大村西屋編『東洋美術大観』五(明治四二年)住吉如慶・具慶の項に掲載
以下、「堯恕法親王日記」についての記事は、『妙法院史料』第一巻「堯恕法親王法日記二」(妙法院史研究会 吉川弘文館 昭和五三年三月)・『妙法院史料』第二巻「堯恕法親王法日記二」(同 昭和五二年三月)・『妙法院史料』第三巻「堯恕法親王法日記三」(堯恕法親王別記(同 昭和五三年三月)より引用した)。

注5 『堯恕法親王日記』寛文九年(一六六九)一〇月一六日の條
十六日、南谷宝積院弟子宮内監者死去仍テ(中略)、今日画工住吉廣純登山、

注6 『古画備考』(朝岡興禎・嘉永三年起筆 太田謹増訂・昭和五十八年八月 思文閣出版)三十三 土佐家 法橋元休の條

注7 後水尾院の寿像作成に関する記事は以下の通りである。
『堯恕法親王日記』寛文四年(一六六四)五月四日の條

注9 『堯恕法親王日記』延宝八年(一六八〇)閏八月二日の條
二日、為焼香參本所、為御追善、図觀音像并書楞經、聞不住覺所覺空々覺円極空所空滅文板行シテ施諸人、今日板出来、則第二七日也、仍テ数十枚摺之施与早、入夜、柳原中納言来駕、
『堯恕法親王日記』貞享元年(一六八四)十一月十九日の條
十九日、泉湧參詣如例、今日中院大納言来駕、信実画定家之像持參也、上二有色紙形、行尹筆也、歌ハあきハまた秋のなかはもすきぬへの歌也、上句ノ分不足也、此絵ノことく二予へ可令画旨彼卿所望也、予領掌、
『堯恕法親王日記』貞享二年(一六八五)八月二〇日の條
廿日(中略)

注12 『堯恕法親王日記』元禄四年(一六九二)二月七日の條
七日、從青門使来、下山城ニ金仏と申有之、後白河院願寺也、仍テ於彼寺来月五百年忌ノ法事修之、仍テ青門へ後白河之御影画ノ所望也、御影ノ像外ニ無之間うつさせ度之旨申来、則使鳥井小路画工一人令同道也、仍テ御影画像令臨写、其後至御影堂木像奉拜度之旨申之間令開封、画工又写木像早

注11

上記以外の堯恕法親王の画事
『堯恕法親王日記』延宝四年(一六七六)六月二日の條
廿二日、從禁中さらし五正拜領、当春御屏風絵予図之間下給之(後略)

『堯恕法親王日記』延宝八年(一六八〇)閏八月二日の條
二日、為焼香參本所、為御追善、図觀音像并書楞經、聞不住覺所覺空々覺円極空所空滅文板行シテ施諸人、今日板出来、則第二七日也、仍テ数十枚摺之施与早、入夜、柳原中納言来駕、
『堯恕法親王日記』貞享元年(一六八四)十一月十九日の條
十九日、泉湧參詣如例、今日中院大納言来駕、信実画定家之像持參也、上二有色紙形、行尹筆也、歌ハあきハまた秋のなかはもすきぬへの歌也、上句ノ分不足也、此絵ノことく二予へ可令画旨彼卿所望也、予領掌、
『堯恕法親王日記』貞享二年(一六八五)八月二〇日の條
廿日(中略)

一、為慈音院宮追福、此中觀音像三十三幅図之、今日三十三人二遣之
『堯恕法親王日記』貞享三年(一六八六)四月二日の條
廿二日(中略)
相国寺へ先年東福門院御寄付之三幅対祖師之像探幽筆之内、中尊於東福門院御殿
焼失、其後不及御沙汰、仍テ只今兩脇二幅耳有之故、中尊夢想国師像予可画之旨從彼寺内々頻ニ懇望之間、今日画之遣彼寺

注12 『堯恕法親王日記』元禄四年(一六九二)二月七日の條
七日、從青門使来、下山城ニ金仏と申有之、後白河院願寺也、仍テ於彼寺来月五百年忌ノ法事修之、仍テ青門へ後白河之御影画ノ所望也、御影ノ像外ニ無之間うつさせ度之旨申来、則使鳥井小路画工一人令同道也、仍テ御影画像令臨写、其後至御影堂木像奉拜度之旨申之間令開封、画工又写木像早

- 注13 『寛恕法親王日記』天和元年二月一日の條
 一日、午刻計從葉室大納言使來、御殿可相渡之旨申來、
 則坊官以下道場莊嚴ノ人遣之、即道場莊嚴也、(中略)
 一、仏台白木、本尊不動明王住吉具慶新像也(後略)
- 注14 『寛恕法親王日記』元禄四年二月七日の條
 一百人一首手鑑歌より合書、巻頭後西院、其外百枚百筆
 也、絵土佐如慶
 右甲府中納言藤中
- 注15 大村西崖編『東洋美術大観』五(明治四二年)に所収
- 注16 『古画備考』二十四 住吉家 住吉如慶の條
 天海僧正御取持ニテ東照宮ニ拝謁スト云、系図ニハ東福門院ノ絵ノ御用ヲ勤
 トアリ
- 注17 『東照宮御絵下絵』(大村西崖編『東洋美術大観』五(明治四二年) 所収
 御縁起、僧正之御口達ニ而廣通畫かれ候得供(中略)
- 注18 以下、安藤良平「江戸時代初期の朝暮周旋について」藤堂高虎と南光坊天海
 『跡見学園女子大学紀要』第六号 昭和四八年三月)を参考にした。
- 注19 注2の「江戸のやまと絵」住吉如慶・具慶」展図録を参考にした。
- 注20 『慈眼大師全集 上』『慈眼大師文書纂』五〇(寛永寺編 大正五年二月)
 一六九〜一七〇頁に所収
- 注21 (同上)『慈眼大師御年譜』(駿府記)(同上)五八二頁に所収
- 注22 中村晃『徳川家三代を支えた黒衣の宰相 天海』(PHP文庫 二〇〇〇年一
 月)を参考にした。
- 注23 以下、榊原悟「住吉具慶研究ノート 延宝七年 三三法師縁起絵巻」制作をめ
 ぐつて『古美術』七三号 昭和六〇年一月)を参考にした。
- 注24 日光のほか、紀州和歌山本・備山岡山本・武州仙波喜多院本が制作された。
- 注25 この他、家康死去後その死体が一時安置された久能山東照宮にも如慶筆「三十
 六歌仙絵扇額」(詞書 後水尾院筆)が遺る。
- 注26 この他、住吉具慶の作品としては「天台大師示寂図」(寛永寺)などが確認で
 きる。
- 注27 画像は「江戸のやまと絵」住吉如慶・具慶」展図録(サントリイ美術館 昭
 和六〇年二月)に掲載。
- 注28 注2の「江戸のやまと絵」住吉如慶・具慶」展図録を参考にした。画像も同
- 注29 図録に掲載。
 『古画備考』(朝岡興禎・嘉永三年起筆 太田謹増訂・昭和五十八年八月 思
 文閣出版)三十四 住吉家 戸田廣重の條
 戸田廣重、稱源兵衛具慶門人(後略)
- 注30 『東洋美術大観』五(同上)
 (前略)遠藤権之助廣宗、廣實の子、廣宗の弟に貫問
 廣賢あり。廣賢は住吉家を嗣げり(後略)
- 注31 土居次義『慈覚大師帰朝図と住吉具慶』(『日本近世絵畫攷』 昭和一九年四月
 桑名文星堂 参照)
- 注32 この他、「松島」の朱文方印を有する作品として「列祖像」が(大光明寺蔵)、
 「松島散人」の白文方印を有する具慶作品として「白衣観音像」(個人蔵、
 「弁財天画像」(個人蔵)がある。
- 注33 注1の拙稿をご参照いただきたい。